鎌倉時代和文について

東辻保和

目　次

はじめに
第一節　鎌倉時代前期
第二節　鎌倉時代後期
結びに代えて

はじめに

和文は、平仮名文とも漢字交り平仮名文とも呼ばれるのであるが、一般に次のように規定される。(1)

和文体の文章。和語を使用し、平仮名で表記される様式の文章。和文体とは、漢文体や和漢混淆体などと対立する古典的文章体の一種である。平安時代の語彙と語法とを規範とするが、普通は、散文表現についていう。

又、具体的には、伊勢物語、庵主、太后御記、篁日記、蜻蛉日記、紫式部日記、和泉式部日記、更級日記、讃岐典侍日記等が「殆ど純粋な和文的なもの」とされている。(2)

平安時代後期以後、話しことばと書きことばとが次第に離れてゆく時代において、平安時代和文の流れを汲む和文体文章は、平安時代和文の語法・語彙を模範として作られる擬古的文語文となる。それゆえに、もっぱら新しい時代の言語の語法・語彙等を研究の目的とする立場からは、和文は魅力の乏しいものとならざるを得ないであろう。既に、根来

司氏、山口明穂氏[3]のすぐれた業績が有るが、中世文語の研究が一般的には盛んでないように見受けられる。おそらく右のところにその原因の一つが潜んでいるのであろう。

しかしながら、広く言語行動という観点に立脚すれば、擬古的和文といえども、そこには言語主体が存在するのであるから、諸〻の言語行為と無関係に存立し得るものであるとは考えがたい。むしろ、擬古的和文の中に潜在する諸問題を掘り起してゆく努力が必要なのではないかと考えられるのである。そういう意味で小稿では、語彙に関して一つの試みをしてみようと思う。

ところで、平安時代語の位相に和文語と漢文訓読語とが有り、両者間に、類義語の所謂二形対立の存在することは、築島裕博士[4]によって明らかにされた、極めて顕著な今日周知の事実であるといえよう。しかして、平安時代和文には、漢文訓読特有語が効果的に取り入れられていることについても、築島博士の明快に論証されたところである。

しからば、鎌倉時代和文においては、右の二形対立はどのように展開されているのか、そのところを考えてみようと思う。そこで小稿では、左に掲げる日記・紀行を考察対象としたい。

源　家長『源家長日記』
源　通親『厳島御幸道記』『高倉院昇霞記』
飛鳥井雅有『無名の記』
阿仏尼『うたたね』『十六夜日記』
藤原経子『中務内侍日記』
二条『とはずがたり』
日野名子『竹むきが記』

第一節　鎌倉時代前期

(一)『源家長日記』

日記成立については、承元四年（一二一〇）末頃とする八島長寿氏説と、建保四年（一二一六）一二月二六日とする石田吉貞博士説とが有る。底本は、源家長研究会編『源家長日記校本・研究・総索引』に依る。

〔和文特有語形のみ見えるもの〕

助動詞……す(5)[5]・さす(4)（使役）　ね(6)（打消、已然形）　接続詞……されば(10)　さて(10)・さても(8)　陳述副詞……など(2)　え（…ず）(3)　つゆ（…ず）(4)　程度副詞……いみじく(1)　おほかた(2)　いとど(3)・いよいよ(2)　情態副詞……かねて(4)　いま(33)　たはやすく(1)　ときどき(3)　やうやう(1)　形容動詞語幹……すこし(9)　動詞……むつかる(1)　ぬ（寝）(2)　く（来）(6)　けつ（消）(2)　たまふ(2)・たまはす(2)　（たち）まじる(1)・まじらふ(3)　形容詞……いかめし(1)　とし(4)　かしかまし(1)　いみじ(1)　しげし(3)　名詞……をとこ(4)　たち（大刀）(1)

〔漢文訓読特有語形のみ見えるもの〕

情態副詞……しきりに(2)　動詞……さへぎる(1)　形容詞……いそがはし(2)

〔二形の併用〕（漢文訓読語形を片仮名で示す）

助動詞……ゴトシ(4)―やうなり(8)　ザル(7)―ぬ(83)（打消）　接続詞……シカレドモ(1)―されど(17)・されども(1)　陳述副詞……イマダ(7)―まだ(3)　情態副詞……アルイハ(5)―あるは(3)　コトゴトク(2)―すべて(8)　シバラク(1)―しばし(4)　スデニ(2)―はやう(1)　タガヒニ(1)―かたみに(1)　動詞……イマス(1)―おはす(4)・おはします(3)　ウムズ（倦）(1)―あく(4)　オヨブ(10)―いたる(4)　ツラナル(1)―ならぶ（四段）(1)　名詞……マナコ(1)―め(8)

次に二形の併用されているものについて用例を掲げ、少しく説明を加える。

○いはけなき子のはゝをうしなへるかことくよのなかのさはきにてなきまとひあへり（60一）
そのよの夢のやうにはかなくならせ給にき（59六）
○むかしの人おのつから見をよはさるも有へし（51一）
「ざる」の内の三例は、いずれも助動詞「らん」「べし」に係って行くもので、和文にも一般に見られる用法である。(6)
山ちもやすくはこえ給さるらんかし（111一）
涙さへとゝまらぬおりそおほかる（2四）
○心ある人のむけにおもひすてぬ道なれはさる人も侍らんしかれとも何のつひてにかいひいたしそめ（「ん」脱カ）(7)（45一）
かやうに申はさしもなき事なと人〳〵思ぬへしされと御製ともおほくちり侍れはたれも〳〵見侍らんかし（24二）
後にはおほつかなき事もおほかりされともいかにしてつたへ見るにか（27三）
○いまた布衣はしめなき程なれは（14八）
「いまだ」に対する「まだ」には、用法上の特徴が窺えるようである。即ち、一例は和歌に見え、他の二例は「まだとう」という、「まだ」に「とく（疾）」の音便形が結合、名詞化したと認められるものである。
なか月やけふのさかりにゝほへ共また露なれす白菊のはな（30四）
十六日のまたとうめしによりて大はんところに参りたれは（41三）
次の日のまたとう水無瀬殿へわたらせ給う（113四）
○あるひは山ちの花をたつねあるひはきよきなかれのみつをむすひあるひいは野辺のをしかの跡を尋ねあるいは雪のあしたのこたかゝりかやうにおりふしの御あそひたゆる事なけれと（25三）
もとよりむれゐたる大とこあるはよしはめる女房もおほくさまよひありく（122一）
次に、「ことごとく」と「すべて」とは意義差が有るように考えられるので、全用例について検討する。

五人撰者おの〳〵せんしあけてのちこと〳〵く御覧しとをしてその中にさもあるを御点ありて（147一）

一巻をひきかくしてかみをよみ侍れはしもはこと〳〵くにくらからす（148七）

(1)すへて正月一日小朝拜はらかひのためしなとまいるよりついなゝとまて一年中の公事のをろかなるやは見ゆる（6二）

(2)参りし時のゆめちもこよなく思ひつゝけられておほけなの身のほとやとそおほゆるすへてくら人の職身におはぬことなり（10一）

(3)糸竹のしらへいつれものこらぬ中に御ひわゝすくれさせ給へるとかやすへて人のまなひとまなふ事いつれものこさせ給はす（24九）

(4)鴨長明かのそみのとけさりしそさきのよの事とのみきゝ侍りしすへて此長明みなし子になりてやしろのましらいもせすこもりゐ侍しか（74三）

(5)寄人たちめしあつめて辰時はかりより日のくるゝまてゝもたゆくあるはかきあるはきもつき心のいとまもなしすへて此歌えらせ給へるさまゝことにけをふきゝすをもとめらる（146八）

(6)すへて此勅撰にはやまひある歌なとをすてられすたゝよきをさきとせり（151二）

(7)すへて六てうしの内のさかりもあかりもたゝ御心のうちにうかへさせたま給へるなり（137八）

(8)ゝ（す）へて二千首におよへるをそこら御覧しあさかへさせ給へれは（148一）

まず「ことごとく」は、用例により察せられるごとく、和歌を一首々々数え上げての、即ち個々の積み重ねとしての全体という意味を持つと考えられる。それに対して、「すべて」は、まず八例共に文頭に用いられていることに注目される。(1)から(6)までの「すべて」は、対象を全体的、包括的にとらえての表現と考えられ、「およそ」とか「だいたい」とかに口語訳される。個々に数えて全体に到る「ことごとく」とは、その方向において逆である。(7)(8)では、具体的に「六てうし（調子）」「二千首」という数値が挙がってはいるが、ここでも「すべて」は文頭に位置され、まず対象を包括的に

とらえているのであって、調子を一個ずつ数えて六調子に到り、あるいは、和歌を一首ずつ数えて二千首に到るというのではない。

以上のように、「ことごとく」と「すべて」との併用は、位相を異にする語詞の混用というように見るのではなく、意味によって使い分けられていたと認めねばならないであろう。

○しはらく庭に候てをとこさうそくにあらためてまいるへきよしおほせらる（175八）

これに対して、「しばし」は四例共に和歌に用いられている。

行かへりすゝみにきつゝならしはやしはしの秋をたもとにそしる（91九）

他の三例は、その所在のみを記す。126六、127七、160一。

○いまたいはけなきとこそうけ給はるにそれもすてに歌よまるとそうけ給しか（72九）

この楽所にもむかしもいまもさるたくひおほく聞え侍されははやうころよりみなたひ候にき（170二）

「はやうころより」は、いささか奇異に思えるが、おそらく「ころより」で「適当な時期から」という意味なのであろう。異文は無い。

○はかなきしちらひも事有かほにもてなしつきしろひてたかひにあらそひあへる身のふるまひ（3四）

おりふし時につけつゝ申かはすふりかたうかたらふあはれなる心にかたみにおもへり（146二）

○（内大臣八）当今の御おほちにいますれは禁中も音奏けいひつとゝまりて（60二）

入道のよにをはせぬ事の口をしうのみそ侍を（110五）

天暦と申けんみかともかやうによろつのみち〳〵に御めくみふかくわたらせをはします事はをそらくも侍らしを（172四）

○いかなる事いひあへりけんなそれにうむしていまはひわをとりてたに見すとこそうけ給はれ（153二）

これに対して「あく」は、四例とも和歌に用いられている。

あかさりしきみかにほひを待えてそくもゐのさくら色をそへける（22四）

他の三例は所在のみを記す。22八、99二、123九。

次に、「およぶ」は一〇例中の五例、又、「いたる」は四例中の三例までが打消助動詞に係る。ここには一例ずつ掲げる。

○ことはもふても及はぬ程也（25一）

ふかき海のそこいたらぬくまなく（51七）

他は所在のみを記す。29三、64五、99六、195五、51二、168一、76一、148一、150九、87七、154三、59九。

「およぶ」では、「心（も）ことば（も）及ばず」あるいは「ことば（も）筆（も）及ばず」、又、「いたる」では、「…至らぬくまなし」のごとき常套句による使い分けがなされたのであろう。

○かねてより参りまうけたる御随身ともつらなりたちて（132一）

にしの座のかみに摂政殿ならひに大政大臣それにならひてきたさまに公卿さふらはる（95一）

○しらかはの御たうともいまはをとろのあとゝのみなり行を御まなこにさへきりてかなしとおほしめせは（195七）

これを御覧しいてゝことに御めとゝめさせ給う（47二）

以上述べてきたところより、『源家長日記』が基本的に和文特有語を用い、平安時代和文の流れを継ぐ作品であることは疑いないであろう。その反面、「しきりに」「さへぎる」「いそがはし」等の漢文訓読特有語のみを使用している例も有り、特に注目したいのは、和文特有語と訓読特有語とで対立する二形が併用されている事象についてである。上述したところであるが、「いまだ」と「まだ」とでは、「まだ」は、ある特定の条件のもとに限られていることが分かる。これは、見方を変えれば、この作品では、「いまだ」という訓読特有語形を用いるのが普通になっているということである。

同様の事象は、「しばらく」と「しばし」、「うむず」と「あく」についても見受けられる。即ち、和文特有語形の「しばし」と「あく」とは、共に和歌に限られており、散文においては、訓読特有語の「しばらく」「うむず」が用いられているのである。又、「ことごとく」と「すべて」についても、意義差により使い分けられているようである。

かくのごとくして、二形の混用と見られるものは、「ごとし」と「やうなり」、「ざる」と「ぬ」、「しかれども」と「されども」、「たがひに」と「かたみに」、「すでに」と「はやう」、「います」と「おはす・おはします」、「およぶ」と「いたる」、「つらなる」と「ならぶ」、「まなこ」と「め」等であるが、その中でも、「ごとし」「ざる」「およぶ」「すでに」を除けば、他の訓読語形はそれぞれ一例にとどまる。

(二)『厳島御幸道記』

成立については、建久九年（一一九八）～建仁二年（一二〇二）説と治承四年（一一八〇）説とが有る。底本に勉誠社文庫『源通親日記』を用いる。

久保田淳氏は、『梅沢記念館蔵厳島御幸記并高倉院昇霞記　解題』において、次のように述べていられる。

その文体は、たとえば『栄花物語』などに近いよくこなれた和文で、しばしば古歌や当代の和歌、古詩、故事などを引いており、作者の教養のほどを窺わせる。（中略）彼は漢詩文にも長けていた。書こうと思えば、通俊程度の漢文を草することは容易であったであろう。しかるにあえて仮名文を選んだのは、想像するに、その読者として女房を思い描いたからではなかったであろうか。（中略）そのような読者をも想定しつつ、不穏な世情の中での珍しい御幸の記録として、仮名文ながらもたぶんに公的な意識の下に書き留められたものが、この『高倉院厳島御幸記』であると考えられる。

更に久保田氏によれば、源氏物語、栄花物語、狭衣物語を初めとして、菅家文草、寛平御遺誡、事文類聚、長恨歌、長恨歌伝、文選、白氏長慶集、久安百首等を引き、あるいは踏まえているとされる。

かかる背景を持つ漢字交り平仮名文では、二形対立の類義語は、どのように用いられているのであろうか。

〔和文特有語形のみ見えるもの〕

助動詞……やうなり(5)　さす（使役）(1)　ね（打消、已然形）(3)　程度副詞……いみじく(2)　いと(3)　情態副詞……いま(1)　かねて(1)　やうやう(1)　形容動詞語幹……すこし(2)　動詞……たばす(1)　おはす(1)　おはします(2)　ならぶ（下二段・四段）各(1)　形容詞……とし(2)

〔漢文訓読特有語形のみ見えるもの〕

陳述副詞……いまだ(1)　情態副詞……あるいは(1)　動詞……およぶ(4)　名詞……かうべ(1)　ともがら(1)

〔二形の併用〕

助動詞……ザル(2)―ぬ(12)　情態副詞……シバラク(1)―とばかり(2)　動詞……ソナフ(1)―まうく(2)

左に二形併用の用例を掲げ、少しく説明を加えることにする。

○何となく波のうきすにゆられありきて夢かゆめにあらざるかとのみおぼやけわたくし思ひあひたるなこりもいかにと（一二5）

久保田淳氏の前出『解題』によれば、「夢か夢にあらざるか」は、もと『菅家文草』巻二の詩序中の一句から出ていると考えられるとされるが、直接的引用に該当する詩句は見当らないようで、したがってここの「ざる」が原詩句訓読の直接的反映とは考えにくい。因に、『高倉院昇霞記』では、「夢かゆめにもあらぬか」（七六4）となっていることとも考え合せねばなるまい。

おもひもかけぬしまのうへに桜のちりかたになりたるみゆ（五〇7）

○おむやうしの舟しはらくまたるゝ（三六6）

海松なともてまいるとはかり御らんしまはりて帰らせ給ふ（四九5）

○しろたへのへい神くはんとりてほうせんにそなへならへたつ（三九10）

草津といふ所にひらはりうちてまいりまうけたり（一四7）

以上のごとく、基本的に和文特有語形が優勢であるが、一方において、「いまだ」を用いて「まだ」を用いていない点に注意しておきたい。

(三)『高倉院昇霞記』

養和二年（一一八二）一月一四日以降の成立とされる。従来、和漢混淆体の先駆的作品として文体的に注目されている。[8]

又、久保田淳氏は「大唐の『白氏文集』とともに本朝の『源氏物語』の表現をさりげなく取り込むことによって、彼は帝王の死を荘厳している」[9]とされ、『解題』において、源氏物語、和漢朗詠集、長恨歌、長恨歌伝、古今集、堀河百首、抱朴子、礼記等を引用典拠に挙げておられる。

かような背景を持つ本『記』において、二形対立の類義語がどのように用いられているかを見て行くことにしたい。

〔和文特有語形のみ見えるもの〕

助動詞……やうなり(6)　ぬ（打消）(42)　ね（打消、已然形）(5)　陳述副詞……え（…ず）(1)　程度副詞……いと(3)　いとど(2)　いよいよ(3)　情態副詞……いま(3)　かねて(1)　しばし(1)　しのびて(1)　形容動詞語幹……すこし(1)　動詞……あくがる(1)　いたる(2)　かづく(1)　おはします(10)　ぬ（寝）(1)　へだつ(1)　やる（破）(1)　形容詞……はやし(1)　名詞……いさご(1)　め（目）(4)　かしら(1)

〔漢文訓読特有語形のみ見えるもの〕

助動詞……しむ(2)　動詞……そなふ(1)　名詞……ともがら(1)

ここで、「しむ」について少しく述べておきたい。まず用例を掲げる。

此ことのはをえんとして無生法忍のくらゐにかなはしめ給へ我もまたあしたのさかへゆふへのをはりとなりなんのちにはかならすしやうとにいたらしめんとなり（一四九4）

これには仏教関係の典拠の存在が予想されるが、未だ詳かにしない。ただ、『浄土和讃』[10]巻末に、「経言　我本因地以念仏心入无生忍今於此界摂念仏人　帰於浄土」とあり、これが首楞厳経の本文であることを知る。[11]

本『記』が『三帖和讃』の影響を受けたとは考え難いが、首楞厳経を踏まえているとすれば、その訓読の反映を考え得ないことでもないであろう。

〔二形の併用〕

陳述副詞……カツテ(1)―つゆ（…ず）(2)　イマダ(1)―まだ(2)　動詞……キタル(1)―く(4)

左に用例を掲げて、少しく説明を加える。

○こんはくはかつてゆめにいらすといふちやうこんかの詩もおもひいてられて（一二六7）

とのゐところにいてゝつゆまとろまれす（九六7）

「かつて」の用例については、その本文に言うごとく、『長恨歌』にこの詩句が存在する。いま、大東急記念文庫蔵金沢文庫本白氏文集巻十二（複製に依る）で該詩句を見るのに、次のように訓読されている。

魂・魄（不）曽て来（り）て夢にタモ入（らず）（二八八行）

本『記』はおそらく漢文訓読の直接的反映とみなされよう。

○こまつのこゝちよけなりしかかれたるをみてちとせもいまたへぬにうきことをおもひしりけるにやとあはれにて（一二二4）

をのゝ宮のおとゝのまたしらぬ人もなど申（し）しためしもおもひいてらる（一一五9）

○たのしみつきてかなしひきたるほとなき身（一〇八5）

かへりくるかりのたのしみなければ（一四七10）

「たのしみつきてかなしひきたる」は、平家物語や太平記にも見られる句で、釜田喜三郎氏[12]の指摘されたごとく、『和漢朗詠集巻下』七九三番（日本古典文学大系に依る）大江朝綱の

楽尽哀来　天人猶五衰之日

の訓読引用と考えられる。溯れば陳鴻『長恨歌伝』の「時移事去、楽尽悲来」からとも言われる。

以上のごとく、本『記』も和文特有語形が優勢である点において『厳島御幸道記』と同様である。漢文訓読特有語形の中でも、「かつて」と「きたる」とについては、訓読の直接的反映の認められるものである。又、「しむ」についても、訓読の影響が察せられる。「まだ」二例のうち、右に掲げた「またしらぬ人」は、金玉和歌集、雑[13]（五三番）を指すものと思われ、あと一例（一二六　10）も和歌の事例である。かくて、対立する二形が混用されているかと思われる事例は見出されないことになる。

第二節　鎌倉時代後期

㈣『無名の記』（『仏道の記』とも）

文永三年（一二六六）から同六年（一二六九）一月までの日記。天理図書館蔵本が孤本である。勉誠社文庫『飛鳥井雅有日記』（永川喜夫編）に依る。

〔和文特有語形のみ見えるもの〕

助動詞……やうなり(3)　す(1)・さす(1)（使役）　ぬ（打消）(7)　ね（打消・已然形）(1)　程度副詞……いと(1)　いとど(2)　いよいよ(1)　情態副詞……いま(3)　しばし(1)　とばかり(1)　やうやう(1)　形容動詞語幹……すこし(2)　わづか(1)　動詞……く（来）(5)　なぶ（並）(1)　まうく(1)　ねがふ(1)　けつ（消）(1)　形容詞……しげし(1)　名詞……まざご(1)

〔漢文訓読特有語形のみ見えるもの〕

動詞……さいぎる(1)　まじはる(1)

ここで「さいぎる」「まじはる」について少しく述べておきたい。まず用例を掲げる。

○みゝにきこゆる声めにさいきるいろみな（は）観念をまし発心をすゝむる知識にあらすといふ事なし（一二11）

正念一に帰すれと邪志なをなかれにましはるや虫損（一三2）

「みゝにきこゆる」の文句は、佐藤恒雄氏[14]によれば、これに先立って述べられる「止観にいつる五縁具足」（一二3）の一たる「得善知識」の内容を、具体に即して述べた説明であるとされる。そのような叙述の流れの中で、「さいぎる」「まじはる」等の訓読特有語形が用いられたのであろうか。

〔二形の併用〕

陳述副詞……イマダ(1)―まだ(1)　名詞……マナコ(1)―め(1)

左に二形併用の用例を掲げ、少しく説明を加える。

○八月十五夜こそのほいとけんとおもへはまたあかつきあかしへと心さしていつ（六6）

さとにてはかゝる雪はいまたみならはす（一四6）

○みゝにきこゆる声めにさいきるいろ（一二11）

三千世界はまなこのまへのこほりのほかしくものそなき（一三9）

「三千世界」の一文は、佐藤恒雄氏（前出）によれば、『和漢朗詠集・雑』五八三番「三千世界眼前尽十二因縁心裏空」（都良香・竹生島）および、同じく「秋」二四〇番「秦甸之一千余里／凜々氷鋪／漢家之三十六宮／澄々粉餝」（公乗億・長安八月十五夜賦）の両句によって合成した表現だとされる。訓読特有語形「まなこ」が用いられたのは、そのゆえであろう。

以上のごとく、本『記』も明らかに和文特有語形が優勢である。その中にあって、混用されたかに見える訓読特有語形も、その幾つかは漢文訓読の直接的ないしは間接的反映と認めて差支えの無い事例である。

(五)『うたたね』

阿仏尼（弘安六年―一二八三―没）一八、九歳頃の作とされる。底本は『うたゝね本文および索引』（次田香澄・酒井憲二編）に依る。

この作品については、酒井憲二氏の論文「『うたゝね』索引による語彙考察」（右書所収）に詳しい考察がなされており、次のように纏めておられる。

『うたゝね』は地の文はもちろんのこと、会話文や消息においても、いわゆる漢文訓読特有語をほとんど含んでいない。（中略）伊勢や蜻蛉、紫・和泉式部日記など以上により純粋な和文語作品といってよいと思う。習作的擬古文と規定せざるを得ない所以である。

二形対立の類義語について見ても、訓読特有語形のみの見られるものは、「しむ」「ざれ」「あるいは」各一例、二形併用は「しきりに」と「しばしば」、「きたる」と「く」が各一例見られるだけである。

○しは〳〵御まへにともなる人々…なといへは（二ウ5）

しきりに身のありさまをたつぬれは（九ウ5）

○都をうしろにてこしおりのこゝちには（二〇ウ7）

みやこの物まうてせんとてのほりきたるに（一五オ11）

(六)『十六夜日記』

底本は『十六夜日記校本及び総索引』（江口正弘編）に依る。

『うたゝね』同様、本作品も純粋和文と呼んで不当とは思えない。二形対立の類義語の内、漢文訓読特有語形のみの

見えるものは、「およぶ」(4)のみであり、二形併用の例は、「やうなり」(3)と「ごと（如）」(1)、「ぬ」(25)と「ざる」(1)、「あくがる」と「うかる」（共に和歌に一例）、「まじる」と「まじはる」（共に一例）、「まだ」（歌）(1)と「いまだ」(3)である。これまで「いまだ」に注目してきたが、この作品でも、散文には三例とも「いまだ」が用いられていることに注意しておきたい。

左に、二形併用の用例を掲げておく。

○文の詞につゝけて歌のやうにもあらすかきなし給へるも（三一オ6）

いまはたゝくかにあかれるうをのこと（三六オ5）

○日は入はてゝ猶ものゝあやめもわかぬほとに（一二オ5）

見し世こそかはらさるらめ暮はてし春より夏にうつる木すゑも（二九オ3）

○ゆくりなくあくかれ出しいさよひの月やをくれぬかたみなるへき（二一オ3）

めくりあふ末をそたのむゆくりなく空にうかれしいさよひの月（二一オ10）

○ときは木ともゝたちまし りて（一一ウ2）

この手ならひに又ましはらさらむやは（五ウ3）

○いまた月の光かすかに残りたる明ほのに（七ウ2）

おほろなる月はみやこの空なからまたきかさりし波のよる〳〵（二六オ3）

(七)『中務内侍日記』

日記の成立は正応五年（一二九〇）三月以後かとされる。底本は『水府明徳会彰考館蔵本中務内侍日記―本文篇』（小久保崇明編）に依る。

〔和文特有語形のみ見えるもの〕

助動詞……す(8)・さす(2)（使役）　ね(10)（打消、已然形）　接続詞……さて(3)　さても(1)　されども(1)　程度副詞……いみじく(2)　いと(14)　いたく(3)　おほかた(1)　いとど(2)　いよいよ(1)　陳述副詞……などか(1)　情態副詞……やうやう(6)　しばしば(1)　しばし(6)　とばかり(1)　しのびて(4)　ときどき(1)　かねて(5)　形容動詞語幹……すこし(9)　しのびやか(1)　わづか(1)　動詞……おはします(18)　ぬ（寝）(7)　けつ（消）(1)　まうく(1)　く（来）(13)　まじる(2)　へだつ(4)　ならぶ（四段・下二段）各(1)　やすらふ(1)　形容詞……うるはし(1)　とし(3)　いみじ(2)　しげし(1)　名詞……かうらん(1)

〔漢文訓読特有語形のみ見えるもの〕

情態副詞……すでに(1)　動詞……しりぞく(1)

〔二形の併用〕

助動詞……ザル(1)―ぬ(55)（打消）　ゴトシ(7)―やうなり(15)　陳述副詞……イマダ(7)―まだ(2)　情態副詞……イマシ(1)―いま(16)　名詞……トモガラ(1)―ひとびと(3)

次に、二形併用の用例を掲げる。

○おなし空ともみえぬ月影おもしろけれは（四オ1）

としをへてけふをかならすちきりこしひとしもなとかとまらさるらむ（六三ウ8）

上にも述べたごとく、「ざる」が「らむ」に係るのは平安時代和文に一般に見える。

○たちのひらをのことくむすひたれたり（五八オ5）

おきにこく舟はゑにかきたらんやうなり（二八オ8）

○ねうはうのつほね（局）ともいまたねぬ所もあり（二ウ4）

わすれすよの上にしけるわれもかうわけしたもとの露もまたひす（二六ウ7）

またみぬさとゝめつらしく（五〇ウ4）

○かやうのともからしやうそきつれたちていてぬれは（七八オ2）

人〳〵おほく（三七オ8）

○いましかくかきかよはせはなさけこそあひにあひぬるちかきしるしよ（七四ウ3）

いまうかひたる心ちして（四二オ5）

この日記が和文特有語の優勢であることは以上によって明白であるが、ここでも「まだ」よりも「いまだ」が多用されている事実に注意しておきたい。「またみぬさと」が国基集（一二〇番）や寂蓮法師集（三〇七番）に見える表現であることを考え合せると、この日記では、「まだ」は和歌に限られていることになる。

(八)『とはずがたり』

成立は上限が嘉元四年（一三〇六）七月一六日、下限は正和二年（一三一三）一一月七日以前とされる。宮内庁書陵部本が孤本である。小稿では、笠間書院刊の影印本に依る。

〔和文特有語形のみ見えるもの〕

接続詞……さらば(5)　さて(64)　されば(17)　されども(2)　陳述副詞……え（…ず）(5)　などか（…ざらん）(6)　つゆ（…ず）(14)　程度副詞……いと(133)　いたく(29)　いとど(19)　いよいよ(3)　おほかた(1)　情態副詞……かねて(8)　すべて(6)　しばし(27)　とばかり(2)　かたみに(5)　もしは(3)　やうやう(11)　ときどき(4)　しのびて(5)　いま(11)　はや(15)　形容動詞語幹……なほざり(1)　動詞……ぬ（寝）(10)　おはす(19)　おはします(161)　けつ（消）(3)　へだつ(11)　たぶ(7)　たまはす(7)　形容詞……うるはし(1)　いみじ(6)　（こと）しげし(2)　名詞……こうらん（匂欄）(1)　かしら(2)　ささがに(1)

〔漢文訓読特有語形のみ見えるもの〕

陳述副詞……いはんや(3)　情態副詞……しきりに(9)　すでに(19)　動詞……かうぶる(8)　名詞……つるぎ(5)　まなこ(1)

〔二形の併用〕

助動詞……ザル(5)―ぬ(224)　ザレ(3)―ね(90)　シム(2)―す(24)・さす(8)（使役）　ゴトシ(1)―やうなり(58)　陳述副詞……イマダ(30)―まだ(5)　形容動詞語幹……スミヤカ(1)―とし(13)・はやし(1)　動詞……オヨブ(6)―いたる(4)　キタル(3)―く(48)　ツラナル(1)―ならぶ(4)　マジハル(3)―まじる(4)・まじらふ(2)・まじろふ(1)

次に二形併用の用例を掲げ、少しく説明を加える。

○二たひかへらさるはことの葉に候は欤（巻一、103―11）

またしらさる人にむかひても千秋萬歳を契り（巻五、3―8）

前者は後深草院の東二条院への返事に見えるものである。「綸言汗の如し」を踏まえているといわれる。[15] が、後者は「ある尼」（「この島の遊女の長者」）の詞として引用されているところからすれば、前者の「ざる」も、果して漢文訓読の反映（仮に間接的にもせよ）と言い得るか疑われる。

なとうたをたにまいらせぬそ（巻三、84―8）

○いまこゝにありとはおほえねともほうくゑつのくものうへわすれたてまつらされはよきやうをはいする心さしもふかきにはかはらすそおほえし（巻四、31―5・6）

これは、菅原道真の「去年今夜侍清涼」（『菅家後集』）を踏まえている箇所であるが、一文の中に「ね」と「ざれ」との併用されている例である。

○けちえんをとをさからしむるうらみやるかたもなけれは（巻四、39―7）

くこんなととらせてあそはするに（巻四、2―11）

前者は、春日明神の夢中の告知である。

○いまたいふかひなきほとの心地して（巻三、6―5）〈詞〉

けさのあり明のなこりはわかまたしらぬ心ちして（巻一、67―3）〈消息〉

「いまだ」は地の文、会話文、消息のいずれにも多く用いられているが、「まだ」は少なく、その内二例は和歌である。

○すみやかにそれによひ出してをけ（巻三、67―5）

人よりははやき御心なれは（巻三、3―7）

この程にならひてつもりぬる心ちするをとくこそまいらめ（巻一、17―9）

この三語詞については、関一雄氏[16]が、「すみやか」と「はやく」は動作の敏速なことについていうのに対して、「とく」は時刻・時期についていうという意味の違いの存することを論じておられ、語の意味と位相の問題として注目される。

○つき〳〵又申におよはす候（巻一、106―4）

あひあふ物はかならすわかれしやうする物はしにかならすいたる（巻四、29―3）〈詞〉

「およぶ」は、六例の内五例は否定形の「―ず」を取り、残る一例も「申にやおよぶ」（巻四、19―1）という反語である。後者は、善光寺縁起巻一の「三千世界衆生命争不助、此故会者定離生者必滅」を訓訳したものといわれている。[17]

○十二日の夕かたせんせうしさきのれいにとて御おひをもちてきたりたるをみるにも（巻一、78―11）

二千里の外にきにけるにやなとおほせありて（巻三、91―9）

後者は白居易の有名な詩句「二千里外故人心」（『和漢朗詠集』）による。[18]

○せんとうにしられたてまつりて御ふたのれちにつらなりてより（巻四、26―11）

十せんのゆかにならびまし〳〵て（巻五、19―5）

○わ光のちりにましはり給ける御心（巻四、38―4）

これは「和光同塵」[19]による表現であるが、和歌においても用語は変らない。

をしなへてちりにましはるすゑとてやこけのたもとになさけかくらん（巻四、53―5）

はきをみなへしおきすゝきよりほかはまたましる物もなく（巻四、30―7）

てんしに心をかけきん中にましらはせんことをおもひ（巻二、72―9）

概ね以上のごとくであって、他の作品同様に和文特有語形が大勢を占めてはいるが、上に述べた女流日記に比べて、漢文訓読特有語の異り語の多さが印象的である。殊に巻四には、次に引用するごとく漢文訓読特有語形が集中して現れる所が有る。

はわにわかれておもかけをしらさるうらみをかなしみ（68―5）　れんほくわいきうの涙はいまたもとをうるほし侍中に（68―6）　いはむや人りんの身として（69―2）　おもはさるほかにわかれたてまつりて（69―5）　はうはいのせうしんをきくたひに心をいたましめすといふ事なけれは（69―9）　ある時はそうはうにとゝまりある時はおとこの中にましはる（70―1）

これは作者が久しぶりに後深草院に再会した時、院が作者の行跡を疑う物言いをしたのに対して、釈明をしている部分である。このように集中的に漢文訓読語形が用いられるのは、作者の心中にあらたまりと緊張とが渦巻いていたことを示すものなのであろう。

(九)『竹むきが記』

成立は、上巻が元徳元年（一三二九）一二月二八日から元弘三年（一三三三）六月、下巻が建武四年（一三三七）一二月二一日から貞和五年（一三四七）正月とされる。底本には勉誠社文庫『竹むきが記』を用いるが、渡辺静子氏校注の『竹むきが記』及び『竹むきが記総索引』（渡辺静子、市井外喜子編）をも参考にした。

〔和文特有語形のみ見えるもの〕

接続詞……されば(3)　されど(4)　されども(3)　陳述副詞……など(2)　え(…ず)(1)　程度副詞……いみじく(う)(22)　いたく(8)　いと(101)　おほかた(4)　いとど(6)　いよいよ(1)　情態副詞……かねて(7)　いま(15)　しばし(3)　ときどき(2)　し

のびて(5)　形容動詞語幹……なほざり(1)　わづか(3)　動詞……やすむ(3)　おはす(10)　おはします(27)　あく(5)　かしづく(3)　かづく(1)　く(来)(12)　たまはす(5)　たぶ(2)　まうく(10)　ならぶ(3)　まじる(1)　形容詞……とし(7)　うるはし(3)　かしかまし(1)　いみじ(35)　しげし(1)　名詞……ひとびと(30)　いさご(1)　たち(太刀)(3)

〔漢文訓読特有語形のみ見えるもの〕

陳述副詞……いはむや(1)　情態副詞……あるいは(1)　しきりに(3)　すでに(3)　たやすく(1)　動詞……うかる(2)　きはむ(1)　しりぞく(1)

〔二形の併用〕

助動詞……ゴトシ(7)―やうなり(2)　シム(4)―す(4)・さす(2)(使役)　ザル(13)―ぬ(75)　ザレ(2)―ね(13)(打消、已然形)　陳述副詞……イマダ(5)―まだ(4)　情態副詞……コトゴトク(1)―すべて(5)　動詞……オソル(1)―おづ(1)　オヨブ(4)―いたる(5)　名詞……マナコ(1)―め(5)

次に二形併用の用例を掲げ、少しく説明を加える。

○日〻によはりつゝ仏日すてにねはんの山に入なんとすたたし仏の非生〻〻をとなへ非滅を現せしめ給しかことくならんかし(八二下5)

ここには偶〻漢文訓読特有語形が三箇続く。「仏日すでにねはんの山に入なんとす」は、涅槃経の「仏日将レ没ニ大涅槃山ニ」を、又、「非生〻〻をとなへ非滅を現ぜしめ給」は法華文句「非生現レ生。非滅現レ滅」を引いたものと言われている。[20]『竹むきが記』には経文の引き誤りもあるようであり、[21]又、小稿の筆者はこれら経典の当時の訓読の実際を知らないが、漢文訓読語法の反映と考えてよいのであろうか。

はまのかたにうちいてぬるなかめの末はたひことにめつらしからんやうにそおほえける(四九上10)

ちこ十人とゝのへて舞楽をならはせて(一七上2)

しまにかねのはすむすひたるはなをうへさすへし（八一下4）

○あさのなかのよもきはためさるになをく（七〇下12）

これは、十訓抄第五に「麻ノ中ノ蓬ハタメサルニ自直シトイフタトヒアリ」とあるのを引いたものであろう。その元は荀子勧学篇「蓬生ニ麻中一、不レ扶自直」に出ると言われる。[22]

八月二十四日の夜内裏みえさせ給はぬよし二十五日の暁きこえて（二下11）

○先非をかなしめと後悔さきにたゝされはうらみ千万といへとさらにかひなし（八三下8）

「先非をかなしめど」には、『保元物語下』（日本古典文学大系本、一七四8）の「若又先非をくゐ、野心をひるがへす事あらば」、又、「後悔さきにたゝざれば」には『沙石集巻五本』（日本古典文学大系本、二二一5）の「後悔サキダゝヌ事ヲワキマエザルコト実ニヲロカナルカナ」が出典として考えられる。

女房の内にまいる車なともいて入たやすからねは（二六下4）

ついで「いまだ」と「まだ」であるが、『竹むきが記』は二形が殆ど同数であって、他の諸作品とは傾向を異にするのである。しかし用例を検討してみると、二形は使い分けがなされているように思われるので、全例を掲げて考えることにしたい。

剱璽いまたいらせ給はねは（三上13）

春宮は十四五はかりにおはしますいまた御わらはすかたなり（二九上11）

菊ていの大納言わつらはせ給へる八月二十一日にうせ給ぬ御あとつくへき人もいまたおはせねは（五七上2）

このやまにすきにしあとをのこされ侍を代〻の所にうつしきこゆへきをいまたそのまゝにてをはすれは（五八下9）

いまた神事の公事にしたかはさるによりて御ふせをりやくせらるへきよし（七七下7）

またよひの程にたちより給へる（三一上3）

きさらきの中旬にさるへき人〳〵ともなひて天王寺にまうつる事あり（中略）またしらぬたひの空いとめつらし（四一上11）

あかつきまたくらき程に宮めくりにいてゝ（七二上6）

人のけはいもまたみえす（七二上9）

さて、「いまだ」の係り行く語を見るのに、「いらせ給はねば」「御わらはすがた」「おはせねば」「そのまゝにてをはすれば」のごとく、尊敬語が五例中四例を占め、しかも、その対象は皇室および公卿に関する事柄である。この傾向から推測するに、最後の「神事の公事にしたがはざるに」はその意味が十分解りかねるのであるが、朝廷の儀式に関する事柄ゆえに「いまだ」が用いられたのであろう。それに対して、「まだ」の係り行く語句は、「よひの程」「くらき程」「みえず」等の自然的状況であり、あるいは作者自身を主体とする「しらぬ」なのである。このようなところから、「いまだ」には、あらたまった、「晴れ」の意識が伴ったのではないかと思われる。

○春宮立も同日なれは二条殿より卿相雲客こと〳〵くひきわたさる（八四下3）

けんてうなることの儀すへてゆゝしなともいはんかたなくそみえさせたまふ（四五下1）

○たのみつゝをそれみあふく我方になひかさらめや神のゆふして（六六下13）

こはいかなるにか雪におつるにこそありけれなとありしもをかし（六上12）

○下つかへしやうそくしつゝをしこみぬれはきぬいたすにおよはす（一三上1）

むけん頂よりふくりんのあなうらにいたり（八三上10）

○ほさつのやうかうもまことにまなこのまへにかゝやけりとみゆ（七七下5）

人かならすまぬかれさることはりめのまへなれは（五七上8）

以上が概要であるが、やはり和文特有語が大勢を占めていることが分かる。しかしながら個々の語について見た場合、

「ごとし」が「やうなり」の三倍以上も用いられていることに、強い関心を抱かせられる。というのは、他の日記には、かかる例は見当らないからである。訓読特有語の種類の多い『とはずがたり』においても、「ごとし」は一例を見出すのみであり[23]、『源家長日記』を初め男性の手に成る作品と比べても異様である。就中、和漢混淆文の先駆的作品と言われている『高倉院昇霞記』にさえ「ごとし」は用いられていないのである。

結びに代えて

鎌倉時代の仮名日記が平安時代和文の流れを継ぐ中にあって、和文特有語と漢文訓読特有語とは、どれ程の割合でそれらに用いられているものであるかを調べてみた。それによって、鎌倉時代和文の特質の一端が垣間見られるのではないかと考えたからである。

まず指摘すべきことは、従来からも言われているところではあるが、文章作者の性別による区別は殆ど意味を持たないことである。おそらく、擬古的文語文が一種の中性的性格を有するところから生じる結果なのであろう。しかしながら、擬古的文体ということで、すべてを等し並にとらえることもまた正しくないと思う。小稿はわずかに九作品を瞥見しただけであるが、これを

Ⅰ　十六夜日記　うたゝね

Ⅱ　源家長日記　厳島御幸道記
　　無名の記　中務内侍日記

Ⅲ　高倉院昇霞記　とはずがたり
　　竹むきが記

の三群に分けてみることが出来る。即ち、Ⅰ群は漢文訓読特有語形を殆ど使用していない、最も平安時代和文に近い作

品である。それに対してⅢ群は、和文体の中でも最も和漢混淆体に近い性格を有する作品である。Ⅲ群に共通する特徴は、いずれも和漢の典拠を多く有する点である。引用にはそれぞれの方式が有り得るが、直接的、間接的の別を問わず引用という表現行為が、作品の文体形成に関与している事例のいくつかを指摘してきた。先学の諸注釈によって典拠が次第に明らかにされつつあるが、この種の文体あるいは文章の研究には、典拠の究明が不可欠の條件となると考えられる。

いま一つ注意したいのは、漢文訓読特有語の中には、対立する和文語を殆ど吸収したかと思われるような語の存在することである。小稿でも繰返し述べたところであるが、「いまだ」がそれである。Ⅰ群の『十六夜日記』でさえ「いまだ」は三例を数えるのに対して、「まだ」は和歌中の例が唯一箇見られるだけであった。「いまだ」と「まだ」の使い分けの行われたことについても上に述べたが、品位の有る語形として「いまだ」が選ばれたかと推測せられる。この他にも、「しきりに」「あるいは」「すでに」「まじはる」「たがひに」等を挙げることが出来ると思う。

『竹むきが記』の項でも述べたごとく、漢文訓読特有語形は、和文特有語形とは異った、改まりの意識を伴って用いられていたように感得せられる。又、二形対立語の併用が、無原則な混用ではなく、意味用法上に準則のあったことを窺わせるものも存するのであり、それが対立二形の意味論的考察に道をひらく可能性を示唆すると思われる。

なお、飛鳥井雅通については、『無名の記』以外にも論及したかったが、最早その余裕は無くなった。次の機会に俟つことにする。

注

(1)『国語学大辞典』「和文」項、塚原鉄雄氏執筆

(2) 築島　裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』七八一頁

(3) 根来　司『中世文語の研究』(昭和五一年二月)　山口明穂『中世国語における文語の研究』(昭和五一年八月)

(4) 注（2）及び『平安時代語新論』五八二頁
(5) 延べ語数を示す。総索引のあるものはそれに依るが、他はすべて一回の調査である。
(6) 注（2）六三七頁、六八四頁参照。
(7) 石田吉貞・佐津川修二『源家長日記全註解』六三頁参照。
(8) 後藤丹治「高倉院升遐記について」（『日本諸学研究報告』第二十篇、昭和一九年四月）　久保田淳「源通親の文学――混乱期における三篇の『記』について――」（『文学』四六巻二号、昭和五三年二月）
(9) 「平家文化の中の『源氏物語』――『安元御賀記』と『高倉院昇霞記』――」（『文学』五〇巻七号、昭和五七年七月）
(10) 『親鸞聖人真蹟集成』（法蔵館）に依る。
(11) 日本古典文学大系『親鸞集日蓮集』（三帖和讃補注七〇、名畑応順氏）参照。
(12) 「日中文学の影響関係――所謂軍記物語の註釈を例として――」（『国語と国文学』三三巻九号、昭和三一年九月）
(13) 『新編国歌大観』に依る。なお、この和歌は後撰集（一三八六）、清慎公集（一〇一）にも収められているが、作者名の表記を等しくするのは、金玉和歌集である。
(14) 「飛鳥井雅有『無名の記』私注――作為または虚構について――」（『中世文学研究』七号、昭和五六年八月）
(15) 呉竹同文会『とはずがたり全釈』（昭和四一年七月）　『観智院本世俗諺文』に見える。
(16) 「とく・早く・スミヤカニの意味――平安と院政鎌倉の用例について――」（『山口大学文学会志』三五巻、昭和六〇年一月）
(17) 玉井幸助『問はず語り研究大成』三七八頁、昭和四六年四月
(18) 注（17）、三二九頁
(19) 注（17）、三九一頁
(20) 呉竹同文会『竹むきが記全釈』二八八頁、昭和四七年五月
(21) 渡辺静子氏校注本、一七九頁頭注
(22) 簡野道明『増修故事成語大辞典』に依る。
(23) 「御ことつねのことくちんのふねにしやかうのへそ三にて」（巻二、11―7）

（追記）小稿を草するに当り、文献閲覧等で御厚意を賜った稲田利徳博士、黒川昌享氏、菅原範夫氏に深く謝意を表します。